

発達性ディスレクシアの早期発見スクリーニング検査開発

原 恵子(上智大学 大学院外国語学研究科 准教授)

【背景】 知的問題がないにもかかわらず、読みに著しい困難を呈する発達性ディスレクシア(以下ディスレクシア)は、小学校低学年では健常範囲の未熟性とみなされ、気づかれにくい。高学年で著しい学習不振や二次障害を起こした時には、根幹の問題が見えにくくなっており、支援の手立てを考えることが困難になることが多い。早期のリスク発見に有効なスクリーニング検査の開発が望まれている。スクリーニング検査として活用されるためには検出力に優れたものであること、学校で簡便に行えることが大切である。検出力を高めるためにはディスレクシアの中核の問題である文字・音変換(ディコーディング)能力と音韻情報処理能力の評価が不可欠である。

【目的】 本研究は発達性ディスレクシアを早期に発見し支援を開始することができるよう、小学校低学年の通常学級で、担任がクラス全体に対して一斉に簡便に行えるスクリーニング検査開発のために検査試案を作成し、基礎的データを収集し、その効果を検討することを目的とする。検査はディコーディングと音韻意識を考慮して作成された。

【方法】 **【調査課題】** スクリーニング検査(試案)3種(単語並べ替え課題、単語探し課題、つづり正誤判断課題)、単語・非語音読(3・4・5・6文字各10語)、文章音読、Reading Test(福沢、平山、2012)、音韻操作課題を実施した。協力校の事情で実施課題に異なりが生じた。**【協力児】** 関東圏内の公立小学校6校の通常学級に在籍する総計2435名(男子1212、女子1223)。医療機関に読み書きの困難さを主訴として来院した児童11名(小1~小6、うち8名はディスレクシアと診断されている)。いずれも調査に関する倫理的手続きおよび配慮はそれぞれの場での規定に従って行われた。

【結果】 **【各課題能力の発達の変化】** ①3種のスクリーニング検査の成績は、小1・小2間、小2・小3間に有意差が認められ、低学年で大きな発達が見られた。並べ替えとつづり正誤は小4・小5間で、単語探しは小6・小5間で有意差が認められた。②単語・文章音読課題の音読時間は小1・小2間、小2・小3間で有意差が認められた。中学年以降は5文字有意味語は小3・小4間で、4・5文字の非語の音読は小4・小5間で有意差が認められた。

【課題間の相関】 ①スクリーニング検査間には中程度の相関が見られた。②スクリーニング検査とディコーディング能力、および読書力検査間には低学年で中程度~強い相関が認められた。③スクリーニング検査と他の課題間の相関関係は学年の上昇とともに弱くなる傾向が見出された。

【リスクの検出】 2種以上のスクリーニング検査で学年平均から1SD以上の乖離をリスク児と判定した。①小1~小4では、6~8%がリスク児と判定された。②リスク児のほとんどはディコーディング課題でも平均から1SD以上の乖離が認められた。③ディコーディングでリスクを疑われたがスクリーニング検査ではリスクが見出されなかったもの、逆にスクリーニング検査でリスクを疑われたが、ディコーディングには問題がなかったものは外国籍などの特殊事情があるか、あるいは乖離が1SDをわずかに超えるごく軽度の問題であった。④読み書き困難を主訴とする医療機関受診児にスクリーニング検査を実施した結果、ディスレクシアと診断されたもの(8名)は全て2つ以上の検査で1SD以上の乖離を示し、視覚情報処理の問題による読み書きの困難あるいは読解の問題と診断されたものでリスク児と判定されたものはいなかった。

【考察】 **【諸能力の発達の様相】** ①ディコーディング能力は小3までに著しく発達し、小3以降は刺激量(文字数)と親密度の負荷を徐々に克服しながら発達すると考えられる。②他の課題でも低学年の時期に顕著な発達が見られ、諸能力が複雑に相互に関連しながら発達し、そのことが学年の上昇に伴う課題間の相関の低下の背景となっていると推測される。③高学年ではディコーディングせず、単語形態表象から単語を認識するサイトワードの語彙形成が進んでいる様子がうかがわれる。

【スクリーニング検査の特性】 ①3種のスクリーニング検査には共通する部分もあるが、それぞれ異なる要素を含んでいると推測され、複数の検査を用いることで読みに関係する多岐にわたる能力をより正確に評価できると期待される。②課題間の相関から、並べ替え、正誤判断課題はディコーディングと語彙力が関係すると推測される。

【スクリーニング検査の有効性】 ①リスク児と判定されたものほとんどがディコーディング課題で落ち込みが見出され、紙に印刷された複数検査から、ディコーディングの問題を検出できる可能性が示された。②スクリーニングで検出できなかったものにディコーディングの問題が重度の者は含まれておらず、スクリーニング検査は低学年での軽度の問題の検出にはやや鈍いが、中・重度のものは検出することができ、スクリーニングとして有効に機能すると考えられる。

【今度の課題】 今後の課題は、①低学年での音韻意識とスクリーニングの相関を検討する、②見出されたリスクの真偽を掘り下げ検査で確認し、検出力の検証を行う、③スクリーニング検査を用いて発見から支援への実践に役立てることである。